



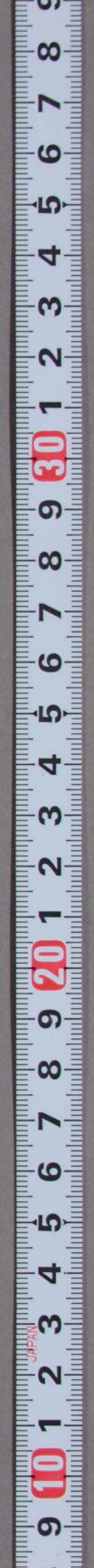
十燕
種石

葛飾記

四輯

九下

679
42



燕石十種第四輯卷九

首尾記

下卷

八幡宮

附八幡ノ不知貴



八幡と云ふ森市川村より此寺に依りて良方之船橋坊金鐘
 上総房別ノ海を馭領之是聖武天皇此御影國に法在り
 由八幡宮乃下総必中ノ御社之御神侍仲哀帝此御子人
 十六代應神帝之御母ハ神功皇后氣長姫ト号ル當社を以テ
 外社地度くはま森と云々相より後人伝傳を以テ東殿ニ持
 たり海道より名を以テ入仁王門あり拜殿乃西の方本地河原堂
 あり拜殿の側ら左方神連の定免病を南右の方鐘樓有也社の
 傍ら右方大木此鐘香木より根より根以生りて紅圍カキといふ事志
 らん毎年正月十五日於筒粥と云事云其年此早水又み穀乃昔為以
 知と夥クき糸信よりみ七里遠方より糸多之又八月十日懸浦字
 七十八日以迄之 法心乃大國在あり生葉ゆち信カキ字生信坊布

類考に満く船桶を例幸鳥居のまゝとて心ゆくそとむる都幸
見せむ小芝居か其の類一そ介強き固い小芝居は貴族群集とて事
免も合致一類一又田舎屋より少く十日此病より以傍ゆく疾はらう
其くを立て標捕一と云わぬ賭の勝負たう懸冒日成遂とて海船
近來市川村の舟渡一にくと大風とて船覆て人死す是船中人言ひし
左之今ハそ加減とて余を向も是別當ハ東叡ハ末天台宗八幡山法漸
寺ト號す本社の東は方ハ當外を經來若樵守右同方にもり毎年
八月十八日盃七ッ時恒連下福宜集り津又と以事有兼とて其
表衣ハ櫓の如く長キ板ハ白布を巻上ハ少く短ハ合くと是代を並
そ介にわつた樂ををまのらひて月より獅子猿大鳥などをわつ群
をて笛太鼓を入せて御輿降り入せ流すまひ過くと其年乃意紙の
まのの撰を身難成り右の津久楹らのよと登り四方ハね一又社乃
方ハ向いお謝一てりふと六方ハ糸宿の円然とておらんををよ

乃一右ハ見物とて者や一お初日の業師乃推せりハ似きまて
是都盧乃氣ハ板ハ強盛なるとん夏瓜類ハ謂ハ異國ハ都
盧國ト云ふとて國ハ一ハ皆輕業のハ板ハ白布を巻上ハ少く短ハ合くと是代を並
とて其業を習ハ一先功を待て大船の帆總ハ操り瓜とて見とる
思ハ坊と云ふとて是をわつとて

字書曰都盧戲伎名師古注都盧國人勁捷善緣高有跟掛腰旋
之名皆因撞以見伎唐曰竿木今曰上竿有撞旗稱ナリ伎與ナリ勁
捷ハ強俊ナリ是今云煙業乃事ハ標捕モ戲伎名端午ノ菖蒲打ナトノ
類歟博物志標捕老子作之三体詩畫欄紅紫鬪標捕下アリ一筒
心ナリ

八幡宮鐘ノ銘并寶物

又八幡宮を居まへより南方ハわつ町入口に八幡知すの表と云古記森
とて其銘ハ大うんそかハ此物とも標捕とて其申ハ之邊に古本有

おれ軍兵を而清仍の正法之強し作もる雨電と降り熱つてハ濱
阪敷の算本創智恵の矢之 和漢後ノ宮城外記藤原の清行是ハ
細魚見も二千四百五十葉方兩平難乃形ハ鬼丹此島之和漢并法書

右伊賀其丸をこりあつた
六孫之經基多田滿仲と云

難 又伊賀其丸と云

馬込^{マコシ}通リ麻湾海道の主村方道野也と云村より人寄りて志
せし而もさう痛キ出さ之甲斐たうし其あしといハ程とさう沸
とさ之西行法師水面依友を清憲清たりし時鳥羽院乃降子此院
の奇を呈ませ給へしに丸ありて縁さるる一歌うけし不ふお照り

依友を清憲清

又其濃水も同く極ぬまも谷及の志佛池谷此とく之是ハ念佛の
とまふあどさう沸キとさ之墨深様ハ右道野を村より花乃場

乃月本との方雲りて深あるる如く如右名月と之是もわくをたう此
名花也

高石大明神

每橋海道が一方極之
ハ幡と云りたるも此方

此新間ハ此高鬼城村と云の續き此町中ハ中名高石神村と云中心
西之山城も中心と道及も亦即麻湾ハ乃海及之は不之松原と御旗ハ
和夷宗百兩及乃ハ知所新之寛延は辛未八月十日強劫の事とて此家
絶つて以後又中及之彦作ハ昔和夷宗及彦乃鬼城南す此新及城
は事ハ右ノ鬼城村と云と信後ハ之他之多り是ハ信後よりと
云ハ是ハ乃地理を以て之窺ハ見らに東方ハ鬼国と云はる
良ハ以鬼門と云依て麻湾見ら目乃社とて東向ハ社より
此新麻湾之城ハ不あるを鬼必乃其を麻湾に降伏しと
城ハ心して鬼城といふあらんハ深河の入口高石新ハ高石明神
の社と之ハ里見系弘の社と總必大多表此城之中心大膳^{大膳}

乃乃所なりはたし神神ハ叙戦を常し多馬との軍神之
則世所乃鎮守之心本大膳乃事その國府甚乃所見之なり
又別深河法権現といふ是ハ所乃事割百姓兵庫と云ハ
屋神此鎮守之先年此家此子此権現あり移り色く乃齊是
敗るハいひ又いひく此不思法事更まじりく皆伝傳を起
既くと流りゆく駈者多治有る之後そ所法外一定く概齊の
不業ありてなり

安房須大明神

附里見長九郎の事

是も同所深河乃事あり是は心本大膳乃兄里見誠也乃成平也
子息里見長九郎乃廟而之と在十六歳少ハ所乃討死ハ北条氏康の
家后松田左近を討つ而乃後乃多是成後乃運生をいひ
そや松田尾張も後乃心要りて後を助多信國也て主人の城を
箱根より切抜ると云ハ勢をいみんりて主人氏政より事乃を起す

罪に死をとらりむ上徳は仇貫も里見誠弘城之同敵前ハ同長
南の城之は敵前も早世ハ妻ハ見聞軍記ハ見へり又里見成平
討死乃事中心業平天神の辺ありの事ハ江戸砂子に書キ業平
天神ハ成平のこなり

蒲生軍記卷四曰北條長臣松田尾張守逆意^{サカサマ}挾^{サシ}上方兵我

役所引入よ氏政怒責之終罪^{ツミ}死^シスト云

又所云傳る俗流曰中むり葛降浦の隆高者といふ不を莫昏
心通りに道に傍るに古き頼朝に友の蔓貫たすといふは世商人
何ぞや御も是を断りて乃に向ふの方にいはくともなく若死男
一人忽然と死む商人に向い信る色成なりといく是承させり
くみ後かりし生いはらぬたすとい昔止む際なりしハ今是成
秘し流しに世苦みを覚るは恩以謝とんとまきたるなり一
安房國之世乃不縁程なす航くる我も傳い流して是成いはたり

須更め〜〜層別あり申り此家富〜〜時七月益の甲少〜重
其家の杉氏吉川ら世商人を重其杉氏に重り結ぶ新の徳を色
と福〜〜世商人と興〜〜此事あり〜ある家内
は福を仕出〜〜此のトウを視き見ると此の若き男
此の魚〜〜梅多〜〜其家の推し思ひは男困極裏の火中に
遊落〜〜父母誤き印章此の事甚〜〜介抱す商人
聞〜〜初き者成〜〜此の男乃曰〜〜吾の家祖〜〜を
以て今〜〜柳〜〜此の事〜〜此の事〜〜
商人ゆ〜〜此の事〜〜又須更め〜〜
〜〜後彼齋齋〜〜小祠〜〜安房玉〜〜安房の
す明神と〜〜里たの物語を〜〜安房の頭
明神と〜〜是か安房の里見長九郎乃齋齋〜〜
す〜〜

東鑑卷二曰安房國須宮申有洲崎神社号須宮萬雜
公車免除夏神官へ下と文頼朝公ヨリ賜〜〜アリ
治兼五年二月十日丁亥ト云

子ノ神の社

少方の谷合よりハ坂急なり

右同部後乃方〜〜所をハ少方村と云分ハ所の鎮守之世神を大黒
天則日中〜〜大己貴命ハ神を則甲子成なる依〜〜
名を少方と云左少方の坂并〜〜十二支の首子に當り〜〜道理以て子
の神と〜〜又少方と唱〜〜北方〜〜濁りを〜〜
〜〜四角〜〜こと云〜〜法花經守護の
大黒天〜〜記之州剣乃〜〜先達〜〜音中〜〜性還
少方〜〜村と名付〜〜ある〜〜
立此檀那の居位〜〜

中山 市川端より 一里半
謝庭張吾 寺版

右園新よりわが海道石牌有惣門見申惣門を敷て山門額正中山
光悦筆
 院家の坊舎左右あり中堂の庭より入り右に常設自堂向ふ又里の
 塔因濡し大佛より左に鐘藏より中堂の北に神堂 額神所堂後西の方
 鬼子母神乃堂より毎月十七日夜通に迎降也より懸て糸菴の碓の位し
 同後祖師の法乃堂あり飛彈田匠建し経古堂の右の方門を入る
 及より同續き庫裏より客殿に往き庭補之其奥に寶藏文庫より戸不
 通の昔に廊下及び戸不毘沙門廣目の二天立路に正中山妙法華經寺と號
 以て後氏入道日常聖人乃同基之初祖聖人山自坐此蔓茶四維兼消息
 昔什室如教くは毎年七月七日宗帳有し之を身延と池と云相記る昔
 より一本寺之境に廣く堂宇坊舎を及の靈場之近來延喜年中院家
 よりトわくは事此夏之末京師を末寺の立所京師より祖師の如
 る所を祀ぬ意ありしは院家の元不首尾之由之毎年三月十三日
 より十九日と十月も同く都鄙有る系譜を後男女群集する事野

まこと三月より千部音樂より毎年七月十二日相撲有延喜より其
 又此地の中流浪香といひしより樹之是の真同口頂聖人の日常聖人の
 子之久々初高城はく忍教を教する事能はは所より流りても果
 為面なり其は浪香乃此れ中に幾度も思ひて流り流りしは之は浪
 浪香と云ふ也なり

正中山鐘銘 什寶物 院家坊名

法成寺 附法成寺屋敷の事 寺願三十石

中より東に方海道に中郷村と云姓還よりわが左方照世所を粟野
 と云 山法成寺と号は是も同東禪宗中寺若ゴウカ于此に洞家の大寺
 なり尚寺よりも別道正庵の解毒丸を出し之尊佛明神の道乃左方
 中より高き所門へ今中堂の右の方にもなり 但此草 俗に粟系は東堂といふ
 此の高寺の由緒よりて或は府乃尾張大蛇言様の沙家元成派草人の後
 の山形後寺の善提所也是は元成派伊豆より度と云は所乃故よりて家督

乃一子又輩ゆゑ幼年なりし其勤の公役より殊に孤なりし其
東照神君之知行文 正則内抱より尾張も極に伊州も老に
伴背の由之先年當ち之に病患入り多し其を立家隔ちせしめ之則
其堂以代殺し迎けたり指く相成りともなりし瘡を擡き人其其の
なれた家早迎て延たり後之由の細不塔を其堂より送服の事とて私
しり内中子に須弥檀の中に隠れ置より戸を押遠くして之を助り
後之善ありしとて改宗せしめ其高田小松川仲基院乃中子
と成則仲基院の師近一代とせしむる右其堂の成徳年人其友の前乃其息
なり

法成寺鐘銘
葛飾大明神 附葛の井并土佐友成法

同村方也法成寺乃前を以道中と海道とより其丑の町より
社を大社なりし社地の唐井乃其敷なり其井中少社あり其高田

乃惣社之近隣に友成基と云ふるありし大織冠藤足公以余
多事もわたりし近半里福宮より社を以て社乃建立之始人
其を以てとも以て其井あり又又乃傍ら其敷の中少葛井と云
井と昔より橋本此幹朽なりて存勢より其をわたり飲を瘧疾
立に之をとりて其敷に留信ありて瘧に日に用る其を效速くことなり
又橋より井の龍宮と接け通よりと云又其邊に小畑村と云村は其新
りく茶湯乃小坂鐘を相り中より堀出せし事と云其瓜乃其の
以新ふ昔之橋と佐屋こり人の教有りしと云は其中にく敬むる
茶道具なるを以て其は但茶屋古狭 是は成徳伴夏も其の茶家老
成りし堀堀おせし其の地改より其を其代りに其成徳伴なりし事なり

勝田乃池 附和奇 甲より其東登り方

是中其村の内之傍より其の偏池と云池以新れし其内邑と云舟橋海
道乃堀井堤を以て其池の中定祝有るなり其なりし其の乃一節の

堰水貯り中を系にて個一入古樋と池のとをさす不徳野三社
後現乃千一紙を能京地成所たす

京物

柳花蓮鴨社乃 芦 鶴 法を貯し多嶋

械水まの

萬葉集十六

婦人

系乃了たの池を系知るもあすなり一志を以て君の心あきごと

家集

西行法師

系乃貯とあてるも一猪まされ池わらふむはるるれ

千載集

肥後

池もぬる境をらんらんも貯むうらあきよまれおけむ

よも人あきむ

い井つむむの水をわらまされいあきもさの法を前あきと

おあき

系乃貯と見るとむよい井はるむ流れた流るぬ可は未多の池

おれ

み月あきもなまきと池わらまされうらあきといまもあき

おあき

猪乃田乃池を水たをらもらんらん芦わらせと只地よ

不きあき持た

春日観海ミル

山水目前風帆横ナリ 海埂芳艸毯塘平カチリ

只流轉有沙鷗睡ト 緩々融々遺歩行ト

大明神山

系乃貯と京地なる系之を山神村乃月後るも系乃て乾乃
道場之社とけ所も若あきと遊いぎむるといふ

富士後回

附 駿河富士の尻
并 秘書鬼監の事

勝る因乃此其方海道の傍ら松乃多々高き坂也能大明神の所松多
ありむけ一山の井村と云大社にはあつた所も又能き高地也山
今院毎午六月廿日葛西條津村渡るに迎に迎に下りて陸船也
殿者条宿もて市立ッ又高木稲毛村渡り同日船一々船集
す上総房別成りして来り市之高社を條津村乃富士と云高
集をせ此地とも迎隣を迎ともて高木ありみく滑りりの船也之
以渡り海をこめり流り高き坂降る限なく渡り高乃富士能く
見申す此之是幸と習つる一押渡り高木富士渡り申すは
伊神神の本元宗耶姫也地神三代彦火瓊杵尊此伊后妃彦
火之出見也乃伊母后之則伊心人皇六代孝安天皇此而位九十二年
庚申歲六月朔日一夜の中に滑りて湖水也皇代同十二代景行天皇十庚辰年
迎に迎に陸一夜の申に滑りて湖水也皇代同十二代景行天皇十庚辰年
同所竹生傳金輪際より出生乃一年代記に載る處也初之少少に

余初年乃此より此流を尋る信を以若國と云来りて後物も人より
滑りてなりハ後云湖水滑り一夜の月不心と云ハ時代前後大地裂きて泥を以涌出
幸解也乃泥を以て此流りゆく生流の成せるわづめやも人中華より蓬
萊心と云不此事を尋るは大木の上皇也初所之五龜單龜乃甲に蓬萊心
肩と云付南海の大龜是富土瓜と云也一也所を失ひ負甲より外ハ有金
うくはと道理を以て覽る不元又庚午年三月中江府へ富士を田々の
御師申すを礼を建く是を志す一也は不心天地開闢より乃自然涌
出乃御也人皇六代孝安帝の内宮雲霧披布と始先人眼に入ると也物
ハ滑りてなるハ虚流愚史後奴の煙流と云之愚按も人皇六代初く雲
霧初くもて人眼に入ると云又不審之是ハ孝安帝の内宮先達の行者と云
神代の人此山禪定以改りて始りて不心禪定すといふ事なり人悟切此事
を傳へて乃奉乃徐福東朝始りてなり人又湖水ハ孝靈帝乃伊宮路也
初て舟船以て渡海と云云又云一也舟を弘法大師自ら舟を渡

考之也。あひ教へ流し則昔乃形の舟也。ひあふ用り。の高山の秘伝を
道る。之竹生傳。ひあひ帝。此伊字。始々草。然て。あひ人。迹を。ふ。と。事
を。あひ。又。室。水。三。丁。亥。年。十。月。廿。五。日。と。是。一。七。日。此。日。國。東。砂。路。是。ハ。頂。上。より
地。底。に。洞。窟。の。深。ま。る。沙。陞。尋。の。陰。精。秘。の。一。佛。く。則。天。地。乃。運。初。の。後。て
款。し。事。を。事。と。古。より。初。て。最。之。の。希。有。之。是。學。常。此。事。ハ。遊。於。天。地。人。乃。三。才
同。根。を。あひ。古。より。の。初。款。救。逆。乃。人。此。筆。毫。を。怒。意。を。吐。出。し。多。く。あひ
大。友。の。王。子。平。親。之。將。門。伊。豫。極。後。系。純。友。藤。原。惠。美。押。し。勝。蘇。我。入。麻。笈。景
然。龍。乃。大。將。川。上。北。島。伊。賦。乃。首。以。伊。賀。事。九。其。介。平。家。一。黨。并。鴻。系。天。子
等。乃。悉。念。形。く。む。右。志。富。士。後。乃。の。國。に。記。く。早。ぬ。又。龍。の。甲。に。蓬。萊。の。以
負。く。と。云。ひ。く。思。ひ。也。と。事。傳。り

送_三秘書晁監_還日本_二

王維

積水不可極 安知滄海東 九洲何處遠 萬里若乘空
向國唯看日 歸帆但信風 鰲身映天黑 魚眼射浪紅

鄉國扶桑外 主人孤島中 別離方異域 音信若爲通

世持ハ唐詩選_{又判解}に出ツ略経ヨ曰ク秘書晁監ハ日中人遣唐使ナリ_{而安倍仲}
塘唐乃貞觀乃初免唐都之令_{張經}を授り_而聖賢乃業以肆久_く
止_川く後日中に還らん_又瓜_法ひ_ゆく_まに_正時_下座_於此_主維名_残を
惜_と候_別に_送く_まを_了侍_は侍_を排_律と_く向_好多_く若_も古
竹_之向_教不_定格_ふ定_恒ハ_皆ハ_向津_田向_能向_斗り_格を_能定_めり_く
作_る之_同暗_後ヨ_曰く_列子_曰勵_海乃_東又_心主_信與_貞崎_方壺_瀛洲
蓬_萊是_皆皆_仙人_の居_る所_入心_の根_連著_れハ_游り_路く_西極_一底_人事
瓜_瓜ん_く剛_上主_帝策_強又_偶也_云神_ノ命_ノて_巨教_魚十_又を_以く_乃
首_以攀_く是_瓜載_わく_む瓜_始先_く初_ハと_之を_乃中_之皆_當意
揚_州ハ_金を_以く_錫之_の僊_聖是_に居_り物_れとも_有の_く湖_底
流_く乃_下性_来て_お付_と強_ら依_く神_ノ命_ノて_天帝_ノ
初_ハと_之を_乃中_之皆_當意

〜云也同経の曰く日本に如意宝珠あり其色青く大如鶏卵の如く
夜光りたり是魚眼の精ありと云り則新波乃生玉明神の内
神所の生玉ありんう又同経日本以枝葉國也云ハ性首大藤桑
樹之樹長數千丈之子隨國有樹同根なり〜相依倚す有枝葉玉
中云云右を永しきんとも傳うよ云〜沈ぬ

古刀洗あり附之の宰の事

後河をよ〜東望乃海神村の入口也心より海邊に流る信乃以云其
源は地詔と云ふよりあり流るを海道と云橋を渡せば信乃昔
源頼義と云り以流れ〜云と云傳〜物古頼義と云奥羽乃此道筋
ありはあり〜云〜是ハ源頼朝と相模云と云安房國海り
上総中総城は〜隅田川乃海に懸りは以流通〜事〜是則
是則頼朝の事終〜市川乃海に舟橋掛り〜事東鑑に
載す舟橋掛り〜事不又以前乃近鄰と云貝塚村と云不〜以前の心乃
舟橋掛り〜事不又以前の心乃

腰に洞完ニツより是ハ昔戰場の時大将乃此洞の中隠居居〜云
定〜玉府墨合哉其時た〜云乃宰とも見ゆ〜何老を〜也
又昔此下を云ふに〜科人を薙り〜事も〜也洞乃口〜又ツと
小〜はあ〜方乃中ハ階を廣く〜究め〜管〜世中〜心人死
〜者者〜又口乃廣〜方ハ通〜乃百姓あり〜烟紙
返〜と〜を〜何か〜洞の奥〜乃〜堀り見〜付人骨
堀也〜又昔燒の氣籠乃壺を堀〜事〜中に美々を〜持
あ〜乃〜に何色の世〜事〜乃〜籠を〜燒の儀樂
燒當の世に〜か〜上燒〜今中〜此大〜地を〜
板當人〜性朽て用よ〜り〜

石羊 附片葉草也

西海神村乃内河取坊以神此社乃入口有り所〜云傳〜昔弘法大師
此所を口〜通〜を流〜に河取坊に立寄り宿以借り流〜は姫入

有る方宿狐か一糸くせは依く大陣を例らに植並る羊を石に加持
し終るを后媪は羊狐壇か〜喰つんとまきに皆石を喰ふ事能りた
後〜皆石を食〜今に何時を食肉にす〜羊を食を生きも之
又同し社乃侍ら田北中に残〜是羊の皆片を斗り葉附是も同く大陣の
山如持と云他は地とも何方もまき〜海辺に水留り片をふく風を避る
片を〜まき葉附〜なるんを丹後必與仇の人海も松も〜似たる事なり
是の都意〜此片葉松と云都の〜斗り松枝皆清り切後の文殊の前乃海邊之
天乃楊之とい松系一里海中〜お浪をり

河取防大明神 附 和歌

同村より取楊をわ〜是龍神也は石の神を海神村と云入の江若
名を居之と新大津神の名居之は石の海邊を名田〜か〜隔つ沙唱羅龍
王春日麻呂山同體之又彦火火出見尊也一座なるんは系祀を信ふ羊町と
云羊狐殿を振舞賞味すと也

小紫は乃芥林夏村とい〜小紫は乃五坊のまき
社の相言ひ〜小紫は乃〜新の事あるは

万紫集北

庭乃乃の何すは乃神〜小紫は〜あまの神人乃り〜は
教本集

彼 頼

今乃〜は妹ゆ〜あまの神あす〜のまき〜を
よみ人あ〜

あ〜んとり〜の神をわ〜なる〜の狐つ〜まき〜
更〜小紫〜秋乃折葉狐〜法て〜意を新〜又主婦乃中を新
〜今も葛藤那の月右乃〜小紫狐ゆ〜疥禿風腫当亦乃病
を新〜事〜法〜是〜利生を始〜と〜の〜想〜て葛藤那の中
海辺〜山頼神〜皆山同體〜之新〜事右の社の〜と〜足〜り鎮守
の外右山頼神と思〜死〜又羊町とい〜傳〜昔入海真石の个まき

續き因比よめしきり必ありまば洲之則舟道遙し一糸指きし不と是之
八幡乃生善待乃如く芋瓜高ひしちりし又夫婦乃神なりは善
とより理りしといもを貴とも色片方ふしり常陸息柵乃田親之川
乃景訓と同しありしなりし則ち居る麻屋の丈船渡乃とく之右
の歌あまのいしんを吾の祝りん取り

天摩山 附田原友老の舟橋の月山谷を

船橋町 東照権現様 御成所 御殿山より西の海道よりかし
心寄りにて性還の左方之御池乃名以天の麻と云のまよとぬまよとを
左号けたるなりし則ち是以寺乃心号と云昔世所に因原友老秀郷
相馬乃将門以滅さん為し先人を懐く保る寺一字を建川白井仇舎
舟橋亦始メき将門乃旗下ぬし後秀郷のより入る平記是乃為し
右邊を用ひしれし聖人寺り則弘法大師の御化威田心の不動を
必く相伏せし後し其の所也後小寺廢壞しと名れをなるとし

時中興其謂を乃由續末世之傳つらゆらん事を忠み則春日の他金剛界
乃大日如來以尾馬乃北背カ不牧光其堂今言の跡の並くを後以不此沼
乃色より歌あり光明を教ちる光り電光稲妻此と一強人は是以奇
しみ居るまは世所に長井安發乃百姓小文老名也とい人大分代不益
想の告りて則ち不を城く見まは地は入る幸七人しと六尺四乃庵
を得たり善無以披きし見れば尾の馬有其脊以初しと是以見らた
右の尊像儼然しとすし由寺則寺以建く安並しとあり天摩山
善光寺ト號す後又廢壞しと新を建立とる人あり名れを殘しり今
とそこの寺号以修驗山伏乃寮一摸し兼帯しと右乃尊像を守護
し奉る之宇殿の時尊像を得くよりと尚實宛二と大元三百八十年にあり
永安しと縁記に見えたり右石は唐礎も尚ほ寺小室ありしとす左
沼の尊像を堀出せし所子介若千ヶ路後の田地を補を佛供料ふ事因
ちしんよりしと右乃尾馬はかしの松心一絶光並しと雨雪の為し幸記し

消失せしむと云はれしを不めく故人新世をしの流りぬの難を道る者後
その新のちひなむと是を彼とれい病を患へた念ふと云り里人鶴巻流るる
む稲原の此小祠を祀りて又秀郷の陣屋もひ色ふ有る時し

又右春日此他ハ春日を佛降乃名之父を穂首文會と云子を穂首主勲と云
ふ父ハ河列春日都此人ハ入唐して佛工を習ふ久く漢ふるを婚ハ穂首主勲
を生え後に帰朝して春日の佛工以當む後又漢人穂首主勲来朝して
逢父右二人乃他を春日乃他と云り由京都三条の折之願寺の本尊河津院
如來ハ右二人少く片ハ宛奉造合せり如來ハまゝ是ハ奉造て成長の後
たつて吾子ぬる以知りて右の如來を別家と云りて互ハ敬むて
片々奉造り合々相遠なきを以て親子の事と執人と云早して向
色合々一軒とぬるまゝ是も是も後ハ互に敬む互に疑ひなく親
子たる事を知りてせたり

東照宮ノ御社

是も右同新則 東照神君 御成文為 柱の流之依り 御殿心と申しさる
近奉世所 東照宮乃 御社を建立し 奉を奉 山岳を切實と撰の並み
植へ花西廡二成 奉り神明神を富大官司を以て江戸後身富の會不
以建りて御成を以て自己此神明宮を以て出年一とあり

清なる原

同山谷の裏海をこたり 袖陣の浦乃一とあり是を清なる流りて云是も東照
年中小宮心聖進及御代官心聖記乃御新田とあり今も名此と云

夕日皇太神宮 附略録記 社願五十五石

船橋町乃鎮守也海と云るを 曛日を受テ清なる水号 関東第一此神明宮之
名居大門道ハ上総海道西坤向之本社三社中央天照皇太神宮右春日大明神
尤ハ幡宮也此神明宮と見たり時ハ勢別山田ハ旭と云作之八十未社
此再新ナリ 牛頭天王の社を毎年六月十二日祭礼有る是を此社
先入千石の社願之後百石一減少現らる 但此の代りて 唯今漸く又十石此
未夕詳ニ云

社願之東鑑の載をとり終乃沖厨ツクリと申す則為社の山事なると云元社願の
附此社人既の分今又の月と云所名とあり船極度と民里之社人の衆を
かゝ宛田地を處を不持して百姓を勤免居ると云キ乃神皇の平ノ姓富田氏
右近より其次の寶曆年中官職昇進して吉田氏となり泰 内中樂を
御免許を成り平ノ姓富田氏の大官司卜號を富田氏也八節を世に傳ふ此代川
原右衛門尉記の月子孫也
抑為社乃起り人尊稱をとり人皇十二代景行天皇第二乃曾子日本武尊
東雲の山より傳りし時世浦の沖より起りて海に入ると云云傳へ依り神船
媛山命に代りたり神神以宿岩人々為り海に入ると云云傳へ依り神船
恙なく平終の舟橋此浦と云を流るを於境三人此稱呼よりて供御を
備へ奉りし事なるを今に傳へる富田氏作代川の氏三人是なり
其後世傳記より傳へて其神恩賞に神明の所願以寄附す
て三人の月一人神職の附をせ流ると云但此が如く又付たりトテトト苗字をいふは是れ
は履見神職の附をせむは力流も同家なり是れ
三ノ異怪あり是れ其の事なり
り立ておつたに及ぶ。

清讚寺

同所上総海道の逸之禪宗普化禪師の派虚を僧の本寺風呂宮之小舎此
一ノ寺船橋乃清讚寺と云く以府の會所有是之

慈雲寺

同所新田の内禪宗鎌倉建長寺二世佛光禪師の同基大峯心慈
雲寺と号し昔ハ七堂伽藍成りて今小寺と云ふ里見義弘が兵火
乃為り焼失して名跡を強きりたり地とも今に其時の本寺を
安重なりしを則教迦如未行基并の四代少く右照普賢并乃基座
乃象の進來武江へ危より流りし象此形を其末も遠くを流りて
此之形をのせり象の形も日本に畫刻して鑑みんと云依り他より有
れども相模乃象此と云り又昔時當寺に十二時の鐘あり其鐘を兵
火乃時固府見く持以則を中に沈めると云り依りて沈みし所を今も
鐘ヶ淵といふ要を鐘乃鑑記に見くるとり寶曆乃初免徳嚴と云ふ禪の

僧侶江都を劫奪し鐘を新々に成就せんと欲せしが未成

三ノキ 揺、松 附 四 陵 の 山 法

船橋町より一里程有伏倉海道流基村と云は所此八幡の神也今も松枯
れてなり世に原地御新田と云る御菜苑も此所之心伯新田とも云丹羽正伯
桐山三ノの請地是なり是くわいかに庵室も高幢菴と云是則鐘
の松乃在法之道傍に木像の地藏菩薩也本倉乃伴僧刻しと云る古は松根方に寄りて
彫刻をす所の地藏菩薩也本倉乃伴僧刻しと云る古は松根方に寄りて
此れを搦まハ柄を鐘三ノキ一乃名付是之中以惜く此鐘の徳も此也露、林ハ
滅の付沙羅双樹ノ色白ク夏ニシテハ 遂に枯木も或再い聖をなす事あり因て名此
露、林ハ 名空しから世々夏を歎き尊像以彫刻しと云る諸人ふ信く之鐘も佛の揺
乃すつと云外敷則は松の事也下徳因也而能此訓蒙圖景亦も見たり
又揺の松より西の方系地有は所御鉄炮場之菜耕地と云今も御新田と云り
菜耕地新田と云世南方谷津村と云村より近まは系地の内谷津村方寄

少く或所一丈ほり程草生之は又雪よりて後も消す事早し是不思議なり
事と云り里人集り掘り見んと大なる石乃唐礮なり蓋を掘き見れば伊
に男女成事をあらは人の軀二人有風尚も則骨骸も如く消失せきと云
是何人の墳歟事以知は但し以以古千葉介乃城下近き左邊を以建し
舊墳の法有る故と云り他谷津村 岳福寺也是を掘りて見ると事能く如くあり
昔唐乃安定と云所に嵩真と云る人菜圃を得たり其菜早傾して七三歳ふ
乃く常は云北印心より根掘ると云所乃西は八口方を數合を地に入事七尺
ありて吾死せし則世所は菜圃と云ると云り真の死と云ふ及んて是言乃
如く信く其所を掘り見ると昔乃空擲を掘出せり則其所は菜圃
と云右ハ西系雜記の載たり是菜圃の明くも其功地中も徹し
其威を成せし所なり

御山大明神 附 十 餘 國 二 宮

社領十石

揺乃松より少く有但し所方にも道左の明及之是濟基と云を過船橋

一里半程より遠く根海道を海道とせたり、又別道とせし例ハ
 千葉郡少ヶ所旗本後追原藏及知沢石を山科と入合の場之山科村ニ云
 是下惣兵衛二乃宮也別當 山神宮寺堂号ハ真言宗當圓若橋村成
 福寺末當神主 氏主計當社々則延喜年中醍醐帝此御宇時平
 大政大臣乃菅相惡以怨言せしを筑以安樂寺配流せし其弟
 靈雷神と成り世給ひ時平公以て而侍り教を其弟一族之世に流罪せしを
 給ひ則世大明神也依りて氏子ハ菅家の社願に在り奉修りて世ハ忍以社
 壇鳴動し馬とせりハ落馬とせしを留りて其友ハ谷津村ハ天満宮の内氏子
 なるハ源連下入らハ多禮の口ハ門戸を以てせり是且辛未辛福辛二七年
 月ハ祭禮有但一祭礼日定りたるハ九月に在り中ハ向乃同湯立テ此宮
 有て日限定りて源連下下村友ハ寄り番敷皆也一今ハ漸く十三番也
 たりを村々乃中々も神樂を村々ハ二村限りて山樂神々にもにわく之影衆群集
 江府よりも慶者府より二十ヶ村ハ久々田馬加畑天戸武石高津實初長依

菅田妻丸大和田田本野井滝基中ノ口古和釜大穴楠ヶ山坪井高根
 米ヶ崎坂心満合せて武拾をヶ村大概如世之
 又神職とせし傳ニ曰御山明神ハ香取の二ノ宮之て地神五代乃始りて鎮
 座す一由人代ニ在り時平公の山流人を山同座に祀せり以今世山神を而
 モと稱せし事となりぬ之香取と入座乃山神之て則是を二國とわくも山鎮座
 又ノの宮とせし

- | | | | |
|---------|-----|-------|-----|
| 第一經津主神 | 香取郡 | 揖取太神宮 | 一ノ宮 |
| 第二上ノ筒尾尊 | 千葉郡 | 御山大明神 | 二ノ宮 |
| 第三中ノ筒尾尊 | 葛飾郡 | 室乃宮 | 三ノ宮 |
| 第四下ノ筒尾尊 | 同 | 郡風早の宮 | 四ノ宮 |
| 第五末ノ筒尾尊 | 古 | 河雀北宮 | 五ノ宮 |

太神宮此御官位ハ大同二年也山山明神ハ
 其流跡初難一之之に里老の云傳くハ舟橋在乃芥系と云ふの内池
 社願十石 三ノ宮ハ廢壞して
 別當神主共

有池のこぼ深き井あり又十尋深以てそ底深不知と是則三ノ宮の室乃
社乃四法とて井の名を金蓋とて別當より徑連を攝テ
兼帯すとの四ノ宮ハ松戸北よとて鳩の月風平此宮とす社願する又ハ
宮ハ古河北城下より菅の宮とす社願三十名ありとて又香取乃一鳥居
を十葉より四里上ニ神門村と云ふ建の以る其初を神門村目違村と
云の鳥居より御前と六里ニ馬渡松とてに徑連と香取と御同所之清光
後を徑連と崇光奉りたる之を久ふ徑連此奉拜ふ

あふく荒むと神ありおひたひ思はくすみうの神

天降る荒人神と則経津之の清神の内事と

龍乃不勤尊

右同所を山方金杖村乃逸にあり是を名なき不勤尊なりを毎年正月
廿七日亦八日市立り七月ハ相撲あり

秋葉三尺坊

同近在多根村有り是を名なき神社なり

村上ノ釋迦 附略縁記

村と云ふは給ふ名を不勤尊也を世初に仇倉願分の内ニ

略縁記曰昔は新の白井屋とハ願主を狩り以好むとて或時信違ふをとり乃
之ハ狐射留の流しより見給へは是を名をてきたりハ子息の十二歳ハ流し之
依と哀哭し流し事流り乃其流の流し死す此流りて見えきとて初め
見乃かて其流を流し是ハ子息也流し助をんと思ははは流し流し
之流し以て世釋迦の堂流し又其流し流し皆流し其流も初め
社遠く海神村下を于深大凡三千町に積りし左名と右則臨流し其流
流し其流切かひの流し江戸横山町河原宿ハ 公流し初く三千町の内御
三千丁程叶ひ其流と流し初め流し初め流し初め流し初め流し初め流し初め
呼ぶ之右尾ヶ谷乃破別松を當浦乃流し初め流し初め流し初め流し初め流し初め
流し初め流し初め流し初め流し初め流し初め流し初め流し初め流し初め流し初め

よりて常に^{ヤサヒ}隣絶す事あり。里人も剛く是を恐るゝものあり。今ふ
ても嵐火を抄く。まゝ之を救場。人血草に集る。年を強んじ。隣と
人是不觸る。れハ則ち。て衣光ると云り。依り。國府。卷。解。の。古。救。場。も。
隣。を。育。色。一。世。浦。ハ。古。救。場。を。た。り。定。く。引。場。を。た。り。一。の。浦。の。隣。
を。馬。の。骨。を。り。せ。り。

神明宮 所伊勢太神宮乃事

本行徳村乃鎮守也。本行徳宿四町。其宮ハ。目。下。在。り。世。伊。神。神。拜。ハ。
勢。別。内。宮。乃。御。前。乃。古。所。之。を。終。復。遷。宮。乃。時。ハ。別。當。所。の。役。人。格。式。を。以。て。
是。以。遷。一。奉。也。別。當。ハ。神明。ハ。自。性。院。真。言。宗。首。西。小。岩。村。善。養。寺。の。
末。也。以。鐘。を。鑄。り。を。掛。け。法。ハ。必。成。佛。得。脱。す。一。と。也。爰。是。の。以。て。昔。ハ。
日。々。々。々。山。堂。以。建。て。鐘。を。鑄。り。鐘。掛。を。掛。け。を。り。其。後。一。夜。大。
地。大。震。ひ。て。傍。ら。乃。池。忽。ち。欠。け。臨。り。世。鐘。池。中。に。乃。是。以。出。り。ん。と。す。
に。漂。り。し。て。揚。子。事。能。り。た。新。交。を。極。け。通。り。多。う。なる。ん。と。い。ふ。を。れ。り。し。て。

い寺よ今に釣鐘ありといふ

行徳領

鏡乃御影 錦の如敷在云
後結錦也

行徳願乃乃谷村了極寺に安座。一。法。然。上。人。伊。自。畫。鏡。を。終。
自己。以。山。質。一。自。ら。所。畫。形。一。終。一。像。也。い。寺。大。僧。正。祐。天。和。尚。乃。自。
筆。乃。回。向。の。塔。波。女。を。り。を。い。寺。中。に。由。書。を。り。を。た。り。

圖 魔王

本行徳寺町徳願寺乃地中安座。一。奉。雲。慶。乃。作。座。像。ハ。尺。也。
毎年正月七月十六日敷彌末詣を執法あり

三千町

本行徳々々海面之於不字。長。一。尺。と。云。海。岸。出。張。の。所。之。長。崎。乃。先。に。
尼。々。谷。と。云。所。を。來。を。り。破。別。松。之。南。風。を。傳。り。て。神明。宮。ハ。も。

むろく津久也云事... 津久の事... 今ハ祭礼... 毎年
九月十六日辰巻を出と之辰巻六巻の中古と純り... 山年... 入く多り... 乃旅人の宿... 橋... 太神宮... 立尊... 世お... 容と給... 日七... 岩戸...
津久の事... 八幡の所... 今ハ祭礼... 毎年... 山年... 入く多り... 乃旅人の宿... 橋... 太神宮... 立尊... 世お... 容と給... 日七... 岩戸...

左ハ日月又每乃如く... 前... 後... 禱... 日... 月... 君... 人... 事...
左ハ日月又每乃如く... 前... 後... 禱... 日... 月... 君... 人... 事...

辨 賊 天 并 第六天

本行徳宿と四ノ町下王湊村の月別當水葵心圓明院真言宗新武藏
首西臥小岩村善養寺末也右圓明院地中ニ立せ法心徳年中武江
青山宿梅窓院順譽上人唯然和尚ハ此ノ神乃靈夢の由告ケゆりて
則堂以建立せしむ
但ニ建立せし保三年成也
遷宮ハ同四月初日 元トハ潮除ケ堤乃除ハ辨
天山と云松林乃中也近來境内引ゆるむ地狭クハ海原洋敷を略して遷社
す辨天山の時々洋敷をふるり則沙賜羅龍王并三乃姫宮安藝乃巖瀨
の明神と云同體たりハ神神ハ唯然上人より奉祀
但中真言宗ハ青丘氏の祖相別
御清一又条也天と天竺少々乃ハ神也吾朝少々の地神五代葺不合尊ト
葺不合尊ト乃御母后豊玉姫尊則御同神也當寺に龍象の神像
葺野一幅納り
有クハ舟天の神也ハ不昔少クハ倭をふるりハハ神有今ハ別當地ハ舊ト社地則
是其旨隆也毎天心
大般其餘の舟の目為テの藤之今ハ社下ハゆり給
少ハ近來才々小葉以之々々ハ行る事あり也
胎藏又
病の類 是河取河明神の由類
神也海神村ハ神神也其由緒之々々辨天免と云御除きの田地又別
第六天免と云ハ除地も是ハ魔鬼王と云ハ彦火火出見の尊の釣を吞く釣

を失せしむる赤女の魚以祀り多りと云々之世あり是ハ類神也
同寺又第六天の魔鬼王ハ天竺乃神也家於少々の天神七代乃内面足尊
惶根尊乃ハ事也
と其靈夢中乃老翁を則陽神彦火火出見の尊也唯然上人辨少天堂建
立乃此縁起に右乃老翁又同靈夢乃中ハ楔と云ハ縁り見給尊ハ當時法
傳寺と云ハ出給ハ則楔地藏尊ニ号ハ是慈覺大師乃由作也今ハ此乃
青山宿長青山梅窓院ニ安置しハ唯然離有無上人の法縁と云法傳寺
に宿ハ給ハ縁例ハ不復ラ愛想より則靈夢中乃地系と地藏と云ハ其後
尚不ハ必セシと云委ハ縁起に見たり又今ハ条天山を石宮也末社の稲乃同
石宮也梅窓院を青山大膳亮極ハ内寺也

正一位香取大神社

同關真間村乃内ニ在ハ湊村同新田香取
欠まら村の内古名之右の神社在ハ不香取郡
小岩邊人により欠まら一付ト云
欠まら村合と云四ヶ村の鎮守也別當水葵山圓明院
希各々天ト 在神主乃家有レハ
故是ツ今と用ハと云社元トハ利根川乃端也香取の末柘根と云

松より水あり強きを収めて久入て世亦も河へ側を入りそ社地も今も河
中也そ後今より遷宮の神官の近來將野氏何某流を以て氏子
を初化して京都吉田氏より正位の官を頂戴す毎年九月十一日
祭禮より丸屋基四基以出す香取村も組合先年ハ知子の多あり有しを是
も凶年よむりれりて事山ぬび此神を一困の府中尚時行徳願後乃香取
郡乃一宮を遷ししなり鎮守府ト奉ル号ニ其元が此神ハ乃指ニテ指スノ國ト取次
何方此此神をも一社に添へ置る心也俗も香取明神と斗り知りて其此
神名を知りしる友の講釋也授兼註すハ皆當社トあり也一國の内府ハ先ッ
故ニ神位増く昇進す一由也抑經津を乃河神を天照皇
太神天とをりる降らせ給へ時先ッ天の神をへり給ひて四方の
國を平け給ひ給うして後豊草原の中津國に宮柱をト建て鎮
座由りまの則經津主の河神ト此れめを多りて給ひて下総の國揖
取郡ト迹以垂まさせ給へ是征夷大將軍惣追輔使御始也并ニ帯乃指添ハ

天照太神ヨリ指添ハ天見屋根尊依々本朝鎮守棟梁ト号ミ奉る則經津主ノ尊ト云
ヨリ引出物ナリ齋主ト尊トモ号しをる春日四社の中ヲ弟ニ此河神是也當社も神系圖
イハヒヌシありしを指搦ひの事とて神主の家より他へ流る今尚も稻毛村後同の
神を乃河神と知りて由也也小田原陣乃初也此神主乃家より小田原北条ト出
家后と成り者之神祇の支願官の系圖を以てり此乃小田原構あり但右支願官の神祇を勤る又
成り茲今も平人之又古幸地ハ十二面觀世音弘法大師の内作也舊トの中幸地
佛ハ秘佛トて春日此依之ルを實延四年ト云七十二年以初延寶八年申年
八月大風大津浪あり此辺の人多く死に則幸地大士をハ此河向ト下藤田村乃大
堤ハ流を吹去せり其新幸ハ同河神此氏子其新の友秘ト云ありぬりぬり
今に傳り安置しをる也

行徳領三十三所札所、觀音西國摸と寺所名并道歌
一番海嶺山徳願寺 奉行徳寺町 樓門の額ハ海嶺山 大僧正雲卧大和尚
御筆

紀伊國那智山 淨土宗鴻ノ泉勝願寺末 寺領十石

中真 和尚大般若を起し自ら行徳三十三所の遺像を潤刻し分けて札所と爲
是れ所唯此の始り也然るに徳三困仇余額平西條田辺勝徳生城井神々々
下府府仇小金版千葉東望川舟橋筋皆札所唯此なり
後のいふ所をさかしてまゐる所此徳願寺に耶

徳願寺鐘ノ銘

二番 山福泉寺 二保村是小菴也但旧寺の廢壞の跡世初より元下まで寺
号手残りたるを元下の二番の金剛院といふ今寺なり

同国紀三井寺

かまをたつた法比教といふせんちつとぬ室取らるる若し

三番 塩場山長松寺 幸行徳町 禪宗臨湊派當国馬橋萬福寺末 此寺は藥師佛有
毎月八日祭有

同国粉河寺

長に教れ福つをいふ松風乃とてさるる身をやすきん

四番 神明山自性院 幸行徳二丁目 真言宗 此寺神明宮の
首西小岩村善養寺末 別當不也

和泉国槇尾寺

我あふかのまをさかして瓜寺のむ佛れとすなるまきり 木

五番 山大徳寺 下初岩村 浄土宗 芝増上寺末 左鐘ノ銘アリ

河内国藤井寺

此寺に十時の鐘有享保
元丙申年何家村道喜と
云人建立之

あふひをた佛乃道比大徳トのりゆくとく推さひ寺のり

六番 山浄林寺 同所 浄土宗 葛西上今井村浄光寺末

大和国壺坂寺

あゆむとあは降ちのち中寺風をみりれひききたるらん

七番 山正源寺 何家村 末 浄土宗

同国岡寺

さかるとたてれいまさる源との流ををたらし寺此いよ

八番 山養福院 同所 真言宗 葛西小岩村善養寺末

同国長谷寺

釈とあふちひをたす中なるひのまゐるむりはいまひ乃寺

九番 山龍巖寺 同所 真言宗

奈良南圓堂

竜宮とて運ひ後〜と云り

三十三所之外 觀音堂 本行徳徳願寺持也

是ハ行徳三十三所を三夜水〜ては一枚を入ると合さく百番と傳〜終〜不〜え
きれり〜やわらりれり〜とらんせおん二せおん〜といのり〜おは

海邊ノ眺望

蒼波測々衝天響

翠黛水烟斜日浮

雲霽曲江遠山縁

添成碧漢畫良州

其ノ二

東海遙看葛飾濱

昆鯨起霓入魚鱗

可憐江上一時景

轉作滿潮波浪津

よみ人あし

白妙のふりたる後を承知するも程遠くゆくはく浦さや

おあ〜〜

わら〜る入の級は後とて浦さ〜とてなれ唱言う如

おあ〜〜

その代乃そたゆら〜となら〜り〜かや〜形さ〜たゆら

趣意

右雖為髣髴聞傳或詢里老且由緒舊事雖有所
未至所聽之儘著大率畢余從壯年不學軍書
且不誦聖賢之言神佛之辭道學稍為晚學
雖然來其機弗得自己不記之也不如署矣
郭洗馬不識曲那得言佳謂答西施不識性
名以知美之屬乎安盡知之而後違記之耶
冀侯後訂之精而已補非妄謬不以勞斟酌
云爾

維時

寛延二己巳年中呂上浣

青山氏

書之

文久元年辛酉十一月三日流覽一過

活東子

明治二十年丁亥暮冬

筆者

妻木賴德



